

## 複数都市比較による多元的ドイツ(史)像の検討 —文献史料調査及びフィールドワークを終えて—

法正 祐真

はじめに

本稿では 2023 年 7 月 22 日から 9 月 25 日までの期間、ベルリンおよびドイツ文化圏の諸都市（合計 23 都市）で行った現地研修及び調査について報告する。今夏の現地研修の目的は文書館および図書館での文献史料調査と、ドイツ語運用能力の向上にあった。筆者の研究関心はドイツの人種主義とセクシズムにあり、主に 1920 年代のラインラントを研究対象としているので、これとも関連付けながら以下では研修の内容と成果を報告していく。

### 語学研修と文献・史料調査

まず研修の前半では、フンボルト大学の「Deutsch Erleben」というサマースクールに参加した。このサマースクールは週五日、午前 9 時半から午後 1 時までのドイツ語集中コースで、通常の語学授業に加えて、ベルリン在住のドイツ人ゲストを迎えての質疑応答セッションなども開かれ、実践的なドイツ語のスキルを向上させることができた。また文化活動としてベルリン市内やポツダムなどでのガイドツアーも組まれており連邦議会、連邦首相府、Topography of Terror、サンスーシ宮殿などを訪れることができた。プログラムの最終日にはベルリンでの生活を通じて気づいたことについてクラスメイトとグループを作り、プレゼンテーションを行った。筆者のグループは 1923 年、1973 年（東側と西側）、2023 年という三つの時代、四つの異なる政治体制下のベルリンに着目し、人々の文化や都市生活の違いについて発表した。この語学研修を通じて、多面的にドイツ語運用能力を向上させることができた。

次に、約 4 週間の語学研修と並行して行ったベルリン州立図書館での文献・史料収集についてである。ウンター・デン・リンデンとポツダム通りの分館でそれぞれ書籍を収集した。また PAAA 及び連邦公文書館の利用登録も行い、研究対象に関連する 222 点の史料を確認できた。入手できた史料が膨大だったため、ミュンヘンやラインラントでの文書館訪問計画は変更し、次回以降に調査する史料をリスト化した。

研究に関連して、調査後半に訪れたラインラントでは、1920 年代に売春宿があったとされた住所を実際に三か所確認した。当時出版されたパンフレットに売春宿の住所が掲載されており、それを手掛かりにシュパイヤー、ルートヴィヒスハーフェン、ヴィースバーデンの売春宿跡地を訪れた。売春宿の跡地はシュパイヤーでは一般住宅に、ルートヴィヒスハーフェンではスーフィーの集会所に、ヴィースバーデンのでは洗濯機販売店になっていた。今回訪れた三カ所に限っては売春宿の痕跡は全く確認できなかったが、市中心部からの距離や周辺環境など今後の研究の参考になりうる情報を収集できた。

### フィールドワーク

今夏の研修の後半では多くの都市を巡ることで、ドイツという地域の多様性を知ることができた。都市間は基本的に DB の RE など移動し、各都市内は徒歩やトラムで移動した。その間、記念碑、建造物、住環境、住民層、食文化、産業、言語、気候、地形、植生などを観察することができた。このフィールドワークにより得た多くの新たな知見は、今後研究の解像度を向上させることにつながるものである。以下ではフィールドワークを通じて得られた考察の一部を「歴史」と「ジェンダーと人種主義」という二つの観点から報告する。

はじめに「歴史」という観点から得られた考察を、ローマ、神聖ローマ、国民国家としてのドイツと現代ドイツという順で見えていく。第一に、様々な都市の史跡を訪れる中で、古代ローマ帝国と神聖ローマ帝国の遺産とその広がりを実感した。プラハ、ケルン、ニュルンベルク、マインツといったかつて神聖ローマ帝国の宮廷が置かれた都市や選帝侯が治めた都市、司教座都市など広範囲を旅して初めて、紙面上でしか知らなかった神聖ローマ帝国の長大な歴史と広大な文化圏を体感することができた。

第二に、国民国家としてのドイツという観点では、これまでの筆者自身のドイツ史の見方がベルリン中心、プロイセン中心の見方であったことに気づかされた。様々な都市を訪れる中で 1871 年の統一前後も、第二次世界大戦後の分断を経て再統一した現在も、ドイツの政治や経済、文化は多極的・分権的であり、各都市に自律性と固有の歴史があることを強く印象付けられた。それゆえプロイセンやベルリン以外から見たドイツの歴史像をもっと意識する必要性を感じた。

第三に、20 世紀と現代ドイツという観点でも筆者の従来のドイツ史に対する見方は相対化された。今回訪れた 23 都市のほとんどが第二次世界大戦時に連合軍の空爆によって破壊され戦後再建された都市だった。どの都市でも繰り返し第二次世界大戦時の空襲による

破壊とその後の再建は案内板や記念碑などで説明されており、ナチによる侵略や迫害の歴史とは異なる第二次世界大戦におけるドイツの別の側面に気づかされた。

類似の驚きはベルリンやニュルンベルクでナチ関連遺構を訪れた際にもあった。ベルリンのヒトラーが自殺したとされる総統地下壕跡地はどこにでもあるような駐車場になっていたし、ニュルンベルクの kongresshalle や ツェッペリンフェルトは閑散としていて、煉瓦と石材、コンクリートの広大な廃墟と化していた。確かに一部はドキュメントセンターになっていたものの、想像以上にあっけない印象を受けた。過去の遺産との向き合い方には保存し、記念する以外にも放置したり、平凡でありきたりな場所にしたりするという仕方もあるという点が興味深かった。

次に「ジェンダーと人種」という二つ目の観点についてジェンダーと福祉国家、ユダヤ人迫害、移民社会と人種主義という三つのテーマに分けて考察していく。まずジェンダーと福祉国家という観点についてである。ベルリンではレインボーフラッグがあちらこちらに掲げられていた。それに加えて街頭でのデモや本屋の特設コーナー、美術館や博物館の展示など、様々な場面でジェンダーマイノリティへの関心の高まりを感じた。しかし同時に、ヴォルムスなどで市内を歩いていて見かけた歩行者用スペースを示す道路標識には手をつないだ母子が描かれていたり、蚤の市や公園にはいわゆる「イクメン」よりも子連れの母親の方が多かったりと、保守主義レジームとされる福祉国家ドイツの潜在的な家父長制的ジェンダー秩序がまだ根強く残っているという印象も受けた。

次にユダヤ人迫害についてで、興味深かったのはその歴史の想起に地域差が見られたことである。例えばベルリンにはドイツにおけるユダヤ人とその被迫害の歴史を学ぶことができるユダヤ博物館のような充実した施設や、躰きの石やホロコースト・メモリアルなどが設置されている。これらは主に 20 世紀のナチ体制下におけるユダヤ人迫害の追悼や想起に力点が置かれているといえよう。しかしベルリンを離れてラインラントに行くと、中世のユダヤ人コミュニティに対する、十字軍などによる迫害の歴史が当時のシナゴグの遺跡やユダヤ人墓地などの史跡を通じて想起の対象とされていた。確かにナチ体制下の迫害を追悼する記念碑や躰きの石もあったが、同じユダヤ人迫害の歴史の想起でも、想起の力点や対象が置かれる歴史的な脈に地域差があるという点が興味深かった。

第三に、移民社会と人種主義という観点で特に印象に残ったことは移民の背景を持つ住民の多さである。トルコ系はもちろんのこと、アジアやアフリカ、東欧など様々な地域にルーツを持つ住民がレストランや博物館、公共交通機関など様々な場所で働いていた。例えば

週末に訪れたヴォルムスではトルコ系住民の結婚式が行われていたため、路上で大音量で楽器を演奏する人たちがいたり、車列を成してクラクションを鳴らしながら街中を練り歩く人たちがいたりして、一部の住民は楽しそうに手を振っていたが、一部の住民は不満を露にしていた。こうした摩擦や不満がエスニシティと結びつくのか、反イスラームと結びつくのか、あるいは人種主義に結びつくものなのか、難しい問題だと感じた。

ここで現代ドイツの人種主義をめぐる状況を理解するうえで示唆的な発見として以下の三つの都市での例を紹介したい。一カ所目のヴィースバーデンではギムナジウムの門に **Kein Platz für Rassismus** と書かれたプレートが設置されていた。目の前の通りには FDP と AfD の選挙ポスターが貼ってあったが関連性は定かではない。二カ所目のコブレンツでも学校の入り口に **Schule ohne Rassismus, Schule mit Courage** と書かれたプレートが設置されていた。最後に三カ所目のベルリン、クロイツベルク地区には無名の市民によって設置されたコンクリートブロックの簡素なモニュメントがあった。そのそばには **In Gedenken an die Opfer von Rassismus und Polizeigewalt** と記されたプレートが設置されていた。これらの反人種主義の文言がどのような背景のもとに設置されたのか現時点では未検証だが、移民の背景を持つ住民の人口が増加している現代のドイツ社会において人種主義が市井のレベルで重要な問題になっていることを示唆するものだと言えよう。

結びにかえて

本稿の最後に総括と次回への展望を記す。筆者にとっては今夏の研修が初めてのドイツ生活であり、些細な問題は様々あったもののドイツ語でのコミュニケーション能力を高め、今後の語学学習のモチベーションも高まり、有益な経験となった。また初めての国外での史料調査だったが、修士論文執筆に必要な史料を確認し、なおかつ一部を実際に読むことができ、次回以降確認する史料にも目途がついたという点において充実していた。そして実際に研究対象地域でフィールドワークを行ったことで、ラインラントの複雑な歴史への想像力と知識が深まったことは非常に有意義であった。

約二カ月の研修を無事終えられたのは様々な助言を下さった先生方と先輩方、快く送り出してくれた両親、旅行中に宿や街角で親切にしてくれた多くの人々のおかげであり、この場を借りて感謝申し上げたい。

(2023 年 11 月 2 日受理、2023 年 11 月 14 日公開 ※DESK-Miszellen 編集委員会記入)